

励まされず・受け流されず・悪口にも同意も反論もせず

「傾聴」役、被災者にバトン

相手の話をじっくりと聞く「傾聴」のボランティア活動を、東日本大震災の被災地・岩手県大槌町民同士で根付かせようと、三鷹市のNPOが支援を続けている。6月には町民グループ「傾聴ボランティア大槌・ひまわり」を誕生させ、その一歩を踏み出した。

「お話、聞かせてもらえますか」
「お話を吐き出し、気がつけば1時間が経っていた。」

10月下旬、大槌町のデイサービスセンターの広間で、元公務員の藤原富美子さん(57)が、おばあさんの横に座った。「お住まいは？」「〇〇仮設だよ」「うちの近くです」。おばあさんは避難場所を転々とし、入退院も繰り返した

メンバーは「大槌弁で受け答えするので相手が安心する」と口を

「被災時に交流がなかったのは、人生において楽しかったのは、戦争の最中で、どこかでは、大変さを改めて思った。シベリヤに帰る時、生きて日本に帰る。今回の震災では命のみならず、物にも困らない生活をして居るの。戦争は二度とあってはならないと、唯かに聞いて欲しかったか、ききたかった。又聞きに来て欲しいと言われ、(曜日)で提出してください。」

町民が傾聴した後に書いた報告書には「震災」の文字が目立つ

三鷹のNPO、大槌町民にノウハウ

そろえる。団体職員の菊地敏美さん(59)は認知症気味だった義母を亡くした。「生前、話を親身になつて聞くと、不満を言わなくなつたなあ」と思い出し、加わった。「まだうまくないけど、寄り添って顔を見るだけでも表情が和らぐこともある」

「ひまわり」の生みの親は、三鷹市で人材育成を手がけるNPO法人「鷹ロコ・ネットワーク大槌」だ。三鷹市は傾聴の先進地。06年から市社会福祉協議会などで普及に取り組み、昨年は約130人のボランティアが1260カ所



町民同士の傾聴ボランティアグループに交ざって議論する林田理事長(右端)と岩手県大槌町

を訪ねた。ボランティアのひとり、「鷹ロコ」の林田昭子理事長(65)が「三鷹のノウハウを被災地で生かせないか」と考えた。

震災後、多くの団体が傾聴活動に駆けつけたが、被災者が聞いて欲しい時ではなく、支援側の都合のいい時にしか行けないし、資金が続かなければ終わってしまう。「町民自身で聞き合えば持続できる」と、養成事業を思いついた。

日本生命財団から助成金を受け、13年2月に仮設住宅の集会所で講座を始めた。「安易に励まされず、闘牛士みたいに受け流さず」「息子の悪口にも同意も反論もだめ。『良いところもある』と出すのを待つ」——臨床心理士や傾聴のベテランの専門講座を延べ25時間受け、「ひまわり」がスタートした。

アドバイス役の岩手県立大槌病院の心療内科医宮村通典さん(68)は「仮設住宅に取り残される人や新居に移っても近所と人間関係が築けない人のため、これからが傾聴の出番」と話す。

「ひまわり」は10月から、メンバーから月5000円の会費を集め始めた。小林正造会長(65)は「撤退する事業を引き継いで欲しいと言う団体もある。自立していかないといいけない」。林田理事長は「まだ、スキルアップの費用など支援は続けていきたい」と話している。(東野真和)